

## 16・17世紀日本語音韻の動的諸相

著者	高山 知明
内容記述	筑波大学博士（言語学）学位論文・平成24年10月31日授与（乙第2618号）
発行年	2012
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/120000">http://hdl.handle.net/2241/120000</a>

氏 名 (本籍)	高 山 知 明 (香 川 県)
学 位 の 種 類	博 士 (言 語 学)
学 位 記 番 号	博 乙 第 2618 号
学位授与年月日	平成 24 年 10 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	16・17 世紀日本語音韻の動的諸相
主 査	筑波大学教授 博士 (言語学) 坪 井 美 樹
副 査	筑波大学教授 博士 (言語学) 大 倉 浩
副 査	筑波大学教授 博士 (言語学) 矢 澤 真 人
副 査	筑波大学准教授 博士 (言語学) 那 須 昭 夫
副 査	東京大学准教授 肥 爪 周 二

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、16・17 世紀の日本語における音変化の動的諸相を明らかにすることを目的としたものである。具体的に上げられる言語変化は、[1] タ行、ダ行の破擦音化、[2] 濁音における前鼻要素の消失、[3] ジヂ、ズズの合流（いわゆる四つ仮名の混同）の三つの変化で、これらを当時の話者の言語認識が記された資料、とりわけ『蜷縮涼鼓集』の記述の再評価と新たな解釈を通して論じ、過去の言語の静態の再構（具体的には音価の推定、音韻体系の記述）にとどまってきた従来の日本語音韻史研究を脱却して変化の具体的な動的様相の分析を試みたものである。

本論文は、以下の 8 章より構成されている。

- 第 1 章 序論
- 第 2 章 タ行ダ行破擦音化の音韻論的特質
- 第 3 章 濁音の変化と認識
- 第 4 章 前鼻子音から読み解く蜷縮涼鼓集
- 第 5 章 蜷縮涼鼓集とその周辺－謡曲の発音指南－
- 第 6 章 ザ行音の過剰訂正－耳障りになったザ行音－
- 第 7 章 二つの変化の干渉
- 第 8 章 終章

各章の概要は以下のとおりである。

第 1 章「序論」では、本論文の目的、対象、問題の所在について述べる。基本的な立場として、個々の現象をもとにした普遍性・一般性の解明を目指すのではなく、個別の出来事としての言語変化の諸相を出来る限り復元する個別言語史を重視することを示す。

第 2 章「タ行ダ行破擦音化の音韻論的特質」では、当該変化の特質を明らかにするには、音声学的観点のみに依るのでなく、従来注目されてこなかった音韻論的観点が欠かせないことを論ずる。すなわち、シとス、ジとズにおける摩擦の音色の違いは、音韻論的解釈上は余剰の特徴であるが、現実には識別に大きく役立つ

ていたと推定され、その識別手段たる摩擦要素が、チとツ、ヂとヅに拡張的に発生したのがタ行ダ行の破擦音化であることを論ずる。

第3章「濁音の変化と認識」では、以下の第4章～第7章の議論の前提となる論として、濁音における前鼻要素の消失が論じられる。従来の研究で、前鼻要素を濁音と切り離して取り扱いがちであったことの問題点を指摘し、18世紀初めの資料『以敬斎口語聞書』の分析から、前鼻要素が撥音のアナロジーでとらえられている事実を指摘し、変化（濁音における前鼻要素の消失）の終局におけるそのような認識の発生こそが当該変化の当時における意義を示すものであると論ずる。

第4章「前鼻子音から読み解く蜺縮涼鼓集」では、17世紀末刊行の『蜺縮涼鼓集』を中心的な対象とし、これまで問題にされていなかったその音韻史的意義を明らかにする。すなわち、同年刊行の『和字正濫鈔』の記述と比較して浮かび上がる“発音に対する認識”の違いに厳密な分析を加え、それぞれの著者の認識に懸かるバイアスの差を解明し、『蜺縮涼鼓集』においては、認識上、前鼻要素と撥音との紛らわしさが発生していることを指摘し、当時の前鼻要素の状況を示唆する点に『蜺縮涼鼓集』の音韻史的意義が存すると主張する。

第5章「蜺縮涼鼓集とその周辺－謡曲の発音指南－」では、前章に続いて『蜺縮涼鼓集』の資料性について検討を加える。謡曲指南書である『当流謡百番仮名遣開合』にも、『蜺縮涼鼓集』と同様に撥音に続く音に対し特に注意するよう指示のあること等を指摘し、『蜺縮涼鼓集』の記述する「実態」は、当時の京都人の日常語の観察に基づくのではなく、謡曲での発音指南のあり方の深い影響があることを論ずる。

第6章「ザ行音の過剰訂正－耳障りになったザ行音－」では、前章で解明した謡曲と『蜺縮涼鼓集』との関連性を踏まえた上で、当時の京都知識階層の言語認識の背後にあると考えられる現象を論ずる。特に、『当流謡百番仮名遣開合』においてザ行音を「和（やわらか）に」唱えるようにという指示が見られるように、撥音の後のザ行音を「耳障り」に感じる言語感覚がどのような理由で発生したのかの解明を試みる。検討の結果、著者は、撥音の後のザ行音を耳障りに感じる感覚は、ヂヅが前鼻要素によってジズと区別されていたために、その聴覚上の印象が、ジズ以外のザ行にも影響を与え、撥音後のザ行音にもある種の不正が感じられ、その点に敏感になったものという解釈を示す。そして、前鼻要素がなぜ撥音にも及んだかという点に関しては、前鼻子音の変化とジヂ・ズヅの合流という時代的条件下で起こった過剰訂正であると推定する。

第7章「二つの変化の干渉」では、第3章～第6章の議論を受けて、「ジヂ・ズヅの合流」と「前鼻要素衰弱化」の二つの変化の関わりの本質をどのように考えるべきかを論ずる。著者は、この二つの変化の発生に関して体系内での構造的な有機的関係は認められず、その関わり合いは偶発的に生じた結果互いに干渉が生じたものであり、したがって、個別言語史の文脈でしか取り扱うことが出来ない出来事であると結論付ける。

第8章「終章」では、本論文全体の総括と今後の展望を記す。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、「四つ仮名の混同」と古くから呼ばれてきた日本語史上の出来事を取り上げたもので、全く未知の新しい言語事象の発見や新資料を学界に提供するものではない。当該事象を解明するにあたって本論文が中心的に研究対象とするのは、『蜺縮涼鼓集』という、これまた古くから着目され、亀井孝の研究によってその資料的価値も定説化していると言ってよい資料である。

しかし、本論文は、一見手垢の付いたとも思える研究テーマと文献資料について、従来の定説に満足せず、新鮮な言語史観と鋭利な解釈とを以て臨み、日本語史研究に多くの実りある新見解を提示する優れた研究成果として評価できるものとなっている。本論文の著者のこのような独創性は、既に学界での評価としても定

着している。

本論文において評価されるべき点は以下のようなものである。

- (1) 従来の過去の時代における音韻体系の静態的再構を以て音韻史研究とする立場に満足せず、音韻変化の動態記述を音韻史研究の目的として実践しようとしていること。
- (2) そのために、可能な限りシンプルな解釈と記述を求めるという既成の音韻論的観点に囚われず、一種の複雑系として当該変化（本論文の場合「ジヂ・ズヅの合流」）を捉え、その変化をもたらす要因を資料から虚心に収集しようとしていること。
- (3) 文献資料（本論文の場合中心的是には『蜺縮涼鼓集』）に対して、先行研究の見解に盲従せず、文献著者の置かれた当時の文化的状況をも考慮した複眼的視点から臨み、文献著者の言語観察にその時代に共通するバイアスがかかっていることを配慮した新たな解釈を示し得ていること。

本論文では、著者が以上のような新しい独自の観点を持つことによって、「タ行、ダ行の破擦音化」、「濁音における前鼻要素の消失」、「ジヂ、ズヅの合流（いわゆる四つ仮名の混同）」といった音韻変化に関する多くの新見がもたらされていると考えられ、本論文は、日本語音韻史研究における革新的研究と評価することが出来る。

ただし、著者が本論文で示した資料解釈や事象解釈の全てが妥当であるかどうか、今後さらに検証が必要なものもあると思われる。また、著者の提唱する音韻変化の「動的諸相」の解明が、本論文で対象とした時代や個別事象を超えて可能かどうかは、著者の今後の研究の展開を待たねばならない。勿論、このような課題が残るということは、著者の研究が本論文をもって終わるのではなく、更なる深化の可能性を豊かに持つということであり、本論文が学位論文として十分評価に値するものであるという結論を揺るがすものではない。

平成 24 年 7 月 24 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条（2）に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。